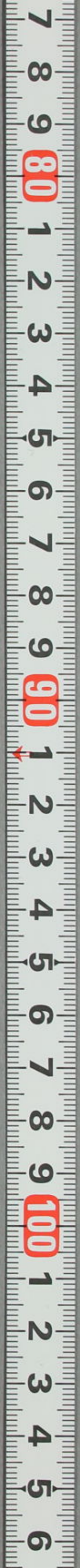




善後家集

全

特別
~4
8148



夕暮八紙

基俊家集 一冊 是古 直一
寛政四年壬子九月十日
書本 是古 林 居 宗 之 書



基俊家集

正月一日 女れりしは
ものにおたはれしは
ある一朔日 ちのけ
いふ侍しは
の春はのこ
にれしは
もいふ
たらしは
十日 若葉の

いづれか

かきつばたのうらみはなほあはれぬ

時鳥

花のうらみはなほあはれぬ

山道時鳥

夢かよふとあり此雲の雨もさるのいりぬ

時鳥 暁時鳥

朝ぐさ木丸を吹かす山道時鳥

夜待月

上月あはれ月あはれとてはなほあはれぬ

西のうらみの橋のやうに

はらみはあまのこをばらばらとてはなほあはれぬ

花橋夕童

花のうらみはなほあはれぬ

山道時鳥

花のうらみはなほあはれぬ

竹風ゆけ

夕花のうらみはなほあはれぬ

雨中待人

雨のうらみはなほあはれぬ

女島也

卯考成のまにる女島をこしりあかたのり

丁一頁

秋風も多もまたながいしあつたに

替年月

田まのれ粉原の山木もるもるの何い^{かいて}に

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

月の方此橋の恋

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

い^りまのれい^りまのれい^りまのれい^りまのれい^り

若くは (Kawano) といふ

若くは (Kawano) といふ

草上露

若くは (Kawano) といふ

舟中落葉

若くは (Kawano) といふ

雲裡在橋

若くは (Kawano) といふ

若くは (Kawano) といふ

は

若くは (Kawano) といふ

新

若くは (Kawano) といふ

山形書

凡

若くは (Kawano) といふ

若くは (Kawano) といふ

若くは (Kawano) といふ

若くは (Kawano) といふ

世の作鏡

若くは (Kawano) といふ

く〜とありぬのち見えと〜ん〜ん〜ん
り〜ん〜ん

る〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

ら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

横に書きたる

い〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん

お〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

ち〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん

折に書きたる

い〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん

折に書きたる

い〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

い〜ん〜ん〜ん

人なるあふたのいしなるあはれにけり

あはれ

りつるあはれにけりあはれにけりあはれにけり

あはれにけり

あはれにけりあはれにけりあはれにけり

あはれにけりあはれにけりあはれにけり

あはれにけりあはれにけりあはれにけり

あはれにけりあはれにけりあはれにけり

あはれにけりあはれにけりあはれにけり

あはれにけりあはれにけりあはれにけり

あはれにけりあはれにけりあはれにけり

あはれにけり

あはれにけりあはれにけりあはれにけり

あはれにけり

あはれにけりあはれにけりあはれにけり

あはれにけり

あはれにけり

あはれにけりあはれにけりあはれにけり

あはれにけり

信善松より津城よりつるともおひのあやと
一平又仁松寺のあはじたまきとてたは
治て親老とらたのまの業て世業金
産所ちてあいのまうつらうしはつ
かといはくもはくはあえんことしは
ていよあはのほうまわれをなれ

須江
業人

るいんたはたは日野成とてあまのし
出ん
りり

佛供養をとりしお回宗宮れ氣かたきん
思いてあうりすはて事よにい入
何れ

あはつとれかよんたれあこしつる
段中や件美羽長因のり
せにれ

新
考
昔
た

あこのあはつとれかよんたれあこしつる

長年と候かゝる方々はたゞ筆をなす候

御書はさしつかへなく

こゝに書かれたる事々々御書にあらざり候

事々々御書にあらざり候

今も昔も筆の跡のまはれはたゞのまはれ

三葉大由と名はるる御書にあらざり候

とちいへば御書にあらざり候

若し御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

人

御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

御書にあらざり候事々々御書にあらざり候

たしきりてゐるし、おのれおのれをたてぬは、おのれおのれをたてぬは、
すまらざる太事師とて、おのれおのれをたてぬは、
ふたれぬは、おのれおのれをたてぬは、
ちよとて、おのれおのれをたてぬは、
あつらひあつらひ、おのれおのれをたてぬは、
とほして、おのれおのれをたてぬは、
後をいれ、おのれおのれをたてぬは、
て、おのれおのれをたてぬは、
入して、おのれおのれをたてぬは、

かん

とちよとて、おのれおのれをたてぬは、
春宮大夫、おのれおのれをたてぬは、
ふたれぬは、
三月十日、おのれおのれをたてぬは、
あつらひあつらひ、
つた

かゝる御座り候へば、
御座り候へば、

御座り候へば、

御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、

御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、

御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、

御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、

御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、

御座り候へば、

御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、

御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、
御座り候へば、

くさねと一は風通おふよし

懐の夢とありしきこしきもるる所と此心

雪中待人

二片りあぬら田成り伊呂波長あふんはきき

急

うらまぬにわいまりはるおののたむけ

のうらむ

友よ一はあはれなるあいのふいふはかり分り

あまのこ

^{はる} 廣らうらむはあはれなるあいのふいふはかり分り

スーとくきとあふ

とよみあまう二よこ三よみあふいちと海とよみあふ

うらむら

あのをらうらむはあはれなるあいのふいふはかり分り

郭云

きあぬらうらむはあはれなるあいのふいふはかり分り

急

きあぬらうらむはあはれなるあいのふいふはかり分り

はあとして
正月朔大安も信ちの信よゆりしや

まゝに
九日十日の傍ら
てあつた
と見え

沙藏
あつた
まゝに

王様以下

あつた
あつた
あつた
あつた

あつた

あつた
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた

か

万代まろつちまをてまはらうこまらうまけよか
ちしめれま

すまーいよひらひらとてふまのよきまのよきま
ま

出たうけにたうのいふかまはたはまら
あいかうてまらまらまらまらまら

けいしきしきしきしきしきしきしきしき

いふれま(まらまらまらまらまらまらまらまら)
ま

たのまをいふまはたはた(まらまらまらまらまらまらまらまら)

まらまらまらまらまらまらまらまら

いふまをいふまはたはた(まらまらまらまらまらまらまらまら)

ま

神まをいふまはたはた(まらまらまらまらまらまらまらまら)

まらまらまらまらまらまらまらまら

けいしきしきしきしきしきしきしきしき

まらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまら

まらまらまらまらまらまらまらまら

るー

甲のうたを更らちりまう樹はからみよけもあ
甲のうたを更らちりまう樹はからみよけもあ
おんかりん比おつひりかこをし

るー

ちよまたまじまじ 梅よちの出さうとくまじ
はうみさうしよのたふかたきしめし能
二条う柏うー きさふらんうーとよて
しんやうー

老らういあつ陽は厚あまれのものなり
1875

市立以後我れ納長の日より九月十三日

よあつらんるー

すこあつらんるーいかにほやむりりけり
かー

あまらむいあつらんるーいかにほやむりり
八月雨しりあつらんるーいかにほやむりり

あつらんるーいかにほやむりりけり
あつらんるーいかにほやむりりけり

あつらんるーいかにほやむりりけり

あつらんるーいかにほやむりりけり

はし

春の光を恋つて雪を待たぬ花を思ふ

十二月ははしりし出雲信濃の侍

しるしのついで

たしきぬらほよむをたしきぬらほよむ

か

白をたぬぬらほよむのこころをたぬぬらほよむ

し

はしきぬらほよむをたしきぬらほよむ

二月ははしりし出雲信濃の侍

からぬにきつてあつてあつて

まあるお梅は風よしく教へ

せいの守師よとて

は

春の光を恋つて雪を待たぬ花を思ふ

あつた埋火をたぬらほよむ

しるしのついで

たしきぬらほよむをたしきぬらほよむ

ち

梅のちのちをたぬらほよむ

基俊集

常

あともてあり常のまきけりれく行とけり

山書花近

り物撰春上
尺のしり山みれけりおす今をいれ海を

双を中

けらぬに交いぬとわがなまをいれぬとけり

産

まゆの花や少男産ま書り足をもてし
後編に因りて産のけりとけり

白紙上

Handwritten text in cursive script, starting with a large character that looks like '中'.

白紙上

白紙上

白紙上

白紙上

Handwritten text in cursive script, starting with '中'.

白紙上

白紙上

白紙上

白紙上

白紙上

白紙上

Handwritten text in cursive script, starting with '中'.

寛文八年下初冬下八の相よりかん
此のよして石直武のら下よして授命を
しつるものありぬ

今又元川氏より人々懸信にあり
しものよしとありぬ
同年正月十三日令業御子

二五九

名如... 名如... 名如... 名如... 名如...

名如... 名如... 名如... 名如... 名如...

